

田口理恵さん

(東海大学海洋学部准教授)

日本のクジラ魚霊供養碑を調査する

ウミガメやクジラ、イルカ、カツオ、カンパチ……日本全国に1000基以上もあるといわれる魚類の供養碑。田口さんが代表を務める東海大学海洋学部の「お魚供養研究会」では、水棲生物の供養のために建てられた石碑の全国調査を進めている。

魚霊供養は日本固有の文化

——魚霊供養碑の調査を始めたきっかけから教えてください。

生き物を供養するのは、日本固有の文化です。各地に残されているクジラやウミガメのお墓などが、その象徴としてよく取り上げられてきました。水棲生物の供養では、クジラやウミガメの墓の全国的な調査はあるものの、ほかの生物の資料やデータはほとんどありませんでした。魚類への供養碑ができた時代や地域、

供養の対象となった生き物の種類などを網羅していけば、日本人が海や川の水産資源とどのように関わってきたかを知ることができると考えました。

日本人は、自然環境と共生してきたとよくいわれます。石で作られた供養碑という人工物を介してみると、日本人と自然環境の関係性がはつきり浮かび上がってくるのではないかと思ったのです。

もともと私は、学生時代からインドネシアのスンバ島をフィールドにして文化人類学の調査をしていました。そこで注目したのも人工物、スンバ島の名産品である織物でした。織物の原料となる綿も染料ももとは

植物。つまり自然から原料を集めて、人工物である織物が作られます。布が作られ、売られていく過程とそこに人がどのようにかわるかを追った結果、人と自然環境とのかかわりや社会のあり方、スンバ島と世界とのつながりがクリアに見えてきた。モノに注目することで、社会の成り立ちがよく分かったんです。

それを日本の水棲生物の供養碑に置きかえたらどうか。たとえば、国際的な問題となっている捕鯨の議論

があります。捕鯨を推進する立場の人たちのよりどころになっているのが、生活のために殺したクジラを供養までするという、日本独自の捕鯨文化を守らなければという思いです。古くから捕鯨を行っていた地域にはクジラの供養碑が数多く残っています。そんな町では、いまでもクジラの供養祭が続いている。

けれども疑問も感じていました。捕鯨文化イコール日本文化だといいますが、捕鯨基地があった地域は限られており、クジラの供養も、いわば、日本のローカル文化のひとつではないのかと。実際、いまの学生たちに話を聞いてみると、クジラ肉を食べた経験がほとんどない。若い世代は捕鯨を身近な文化だと実感していないし、捕鯨業の縮小とともに捕鯨文化も変化していると感じます。

クジラの供養を日本文化だという主張をする前に、地域性や時代の変遷などを議論する必要があるのではないか。あるいは、クジラだけなのか——と。

生き物を吊るのが日本文化だとしたら、クジラのみならず、ほかのすべての水棲生物もその対象になるのではないかと。各地で祀られた生物を見ていけば、水産資源すべてに通底する日本人の生命観、生物の生命を



●たぐち・りえ 東海大学海洋学部海洋文明学科准教授。1965年愛知県生まれ。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得退学。学術博士。国立民族学博物館 COE 研究員、東京大学・東洋文化研究所、総合地球環境学研究所を経て現職。著書に『ものづくりの人類学 インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』（第3回日本オセアニア学会賞）など。